OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中村真造型科学研究室を尋ねて
Author(s)	中西, 徹
Citation	デザイン理論. 1963, 2, p. 33-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中村真造型科学研究室を尋ねて

訪問者

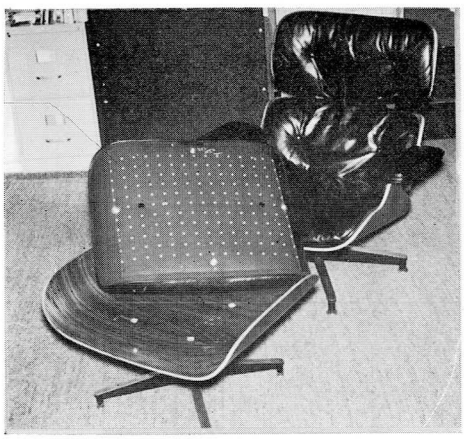
向井正也
元井能
北根肇
中西徹

211—3444とダイヤルを廻す。

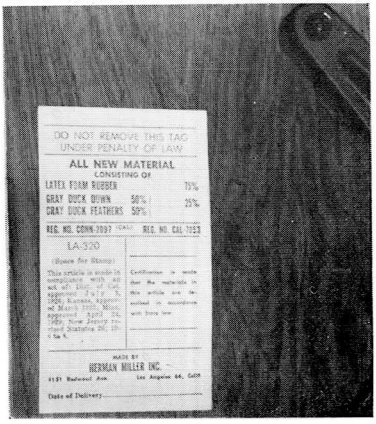
「ハイ，なかむらアトリエです……」と女の方が受話器に出る。

これが，中村真氏の第一印象である。

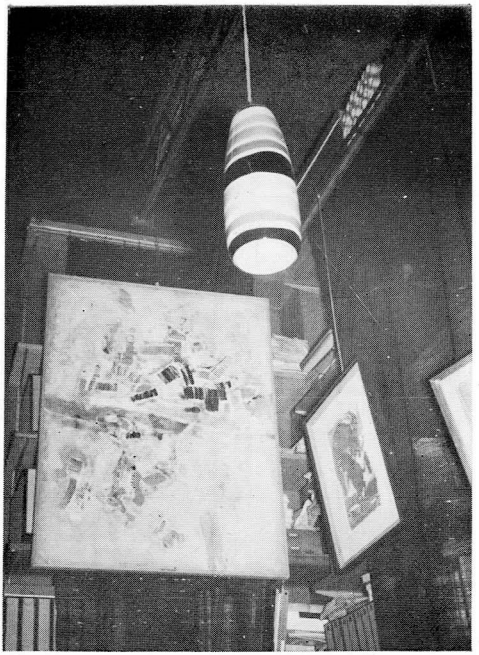
会社や銀行を電話で呼び出すと，至極ビジネスライクに，女子交換手が応答するものだが，大学の研究室とか，デザイン事務所といった所は，おおよそ，ビジネスライクではなく，どちらかと云えばヒュマニスティックである。そんな先入感のあった，アトリエから，至極洗錬されたビジネスの応答を受けて，驚いたのは無理からぬことであろう。



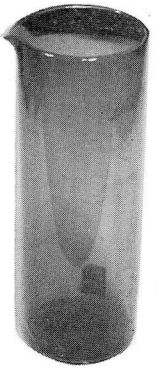
イームズのいす



ヤコブセンのいす



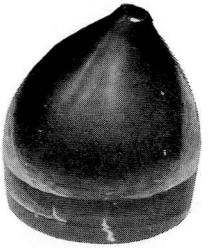
近作の絵と
ヴェニーニのペンダントランプ

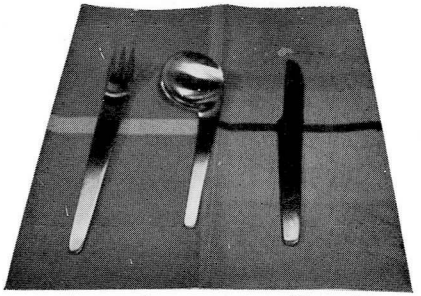


ガラス器(スウェーデン)

時計（イタリヤ製)

ガラス壷
（ヴェニーニ)





フォーク・スプーン・ナイフ（ヤコブセン)

17才の絵

かくて，ビジネスライクに訪問の意を伝え，某月，某日，午後4時に中村真氏宅の近くの十合百貨店の2階のロビーに訪問者一同が集結した。

編集委員の向井正也，元井能，北根肇，中西徹の四名である。

たまたま，十合百貨店二階サロンでは，某新聞社の主催で，「世界商業美術展」なるものが催されていた。

中西が言った。「一寸，これを見て行きましようや。」

元井が言った。「何も喰べなくてもいいでしようか。」

中西が言った。「いいでしよう。」

という具合に，集結場所の喫茶室では，何もとらずに出て了う……

北根が言った。「余り，変りばえがしませんな，マンネリズムですか。」

向井が言った。「グラフィックデザインというものはこんなものですよ，これがグラフィックなのですよ。」

早々に引きあげることにしました。この展覧会を見るのが今日の我々の目的ではないからです。

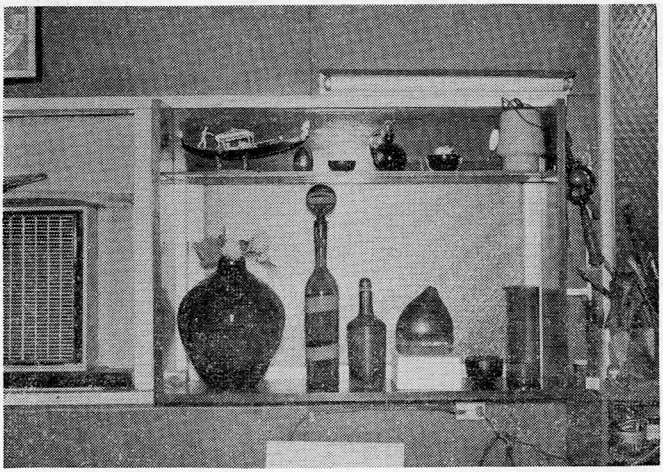
御堂筋も変りました。最近では，勧銀ビル，富士銀行ビル，高麗橋ビル，日本板ガラスビル，日生ビル，御堂会館，新歌舞伎座と，高層建築が両側にズラリと並ぶようになった。その御堂筋に面して，殆んど頑固ともいえる姿のままで居坐っているのが中村真宅である。

ファサードは，ねずみ色に変じて，壁の所々からルームクーラーのお尻が出ているのも面白い。

向井さんは「趣きがありますよ，このファサードは……」と申されました。氏は現代建築の評論家でもあります。

看板に「中村真造型科学研究室」と読みました。造型研究室でなくて，造型科学研究室とあるところがユニークであると向井氏は再びほめました。

玄関の戸を開けると，スバル360が先客で居坐って居り，入る余地がありませんでした。しかし，よく見るとこの自動車は中村氏の愛用車であって，先客



ガラス器のならぶ棚

ではなく，自分のガレージに居坐っているのです。そうと，悟った私達は，スバルの横を遠慮し乍ら入れて載くことにしました。

研究所員の案内に従って，二階の中村氏のアトリエに入りました。

「ドウモ，ドウモ」吾々。

「ドウモ，ドウモ」中村氏。

かくて，現代的アイサツを終えた，我々は，思い思いに座を占めました。

それから，今日お邪魔したのは，実は学会誌の内容を今少しポピュラーにするために，作家のアトリエなど訪問して，いろいろと雑談などして，それを記事にしよう，ということが委員会で決って，その第一の候補者に中村氏がよかろうと云うことになった，というようなわけで実は押かけて来たのであって，お多忙中全く恐縮であるけれども，まあ，学会の為だから我慢していただきたい。」というような口上を四人がシドロモドロ申しました。

やっと口上だけは，何とか申し立てたのでありますが，実は話を始めるより，室内の色んな物が目について，その方に気が行っていけないのです。

画家のアトリエであるから，画架や，描きかけの絵があるのは当然です。勿

論，モダンアート協会の会員である画家のアトリエですから，抽象的な絵がその大半であります。それでも，中村真17才の作という六甲山の絵というものが，やはり堂々とかけてあります。

人によっては，過去の作品を絶対に出したがらないという傾向がある人もありますが，中村氏は，「スゴンザックのようでしよう。」と，少しもはばかる所がありません。

芸術は迂余曲折を経て進むものである。ということを自己のアトリエの中にも展開して，自分を客観的に見る訓練でもして居られるのでしようか。それとも氏のナルシス的傾向が，ややもすれば出て来たのでしようか。次に，大きなステレオが坐っているのは，音痴が多い，画家や美術評論家にとっては，一つの脅迫の武器とも目に映りました。

一方の壁に洋酒棚があるのは，反対にまた訪問者に好感を与え，サービス精神が満点以上である，氏の大阪商人の一面がうかがえます。

更に，一番のオドロキは，アトリエの中にあってアトリエを一段とデラックスに見せている家具類であります。

真黒い，なめし皮のマットを持つ，ハーマン・ミラー社のイームズの安楽椅子と，足掛け，これは氏が竹中工務店の米国派遣員を通じて手に入れられた品物であるとか，

「まあ，中西さん，かけてごらん……」

と云った調子ですすめられて，代る代るイームズの椅子に腰をかけました。腰を落すと，スーと腰が椅子の中に吸い込まれるように沈んで行くのであります。椅子は合板の躯体部分（脚，台，背板，肘掛）と，皮製のマットから出来て居り，マットと躯体は，ホックとボタンにより，切り離すことが出来ます。マットのつめものの割合は下表の通り。

ホームラバー　　75%

鵞鳥のウブ毛　50%
〃　の羽毛　50%　} 25%　（図版参照）

それに空気である。

空気がこのマットの中に入っていて，人が坐ると，下方の空気孔から除々に出るようになっている。このため，スーと吸い込まれるように腰が沈んで行くと解した。

イームズの椅子がウエットなら，ヤコブセンの椅子はドライである。

氏のアトリエにはヤコブセンの椅子が三脚ある。安楽椅子１。事務椅子１。スツール１。

北根さんは，ヤコブセンの安楽椅子が至極気にいった様子であります。

「本当に腰掛けとるという感じがせえへんなあ，なんやら雲の上にのっている感じや，一体，これは何ぼほどしまんねん。」と云った調子で，頭を後にそらせたり，足をピンとあげて，ボールベエアリングのよくきいた回転を楽しんだりしていた。

何しろ，我々にとって，イームズとか，ヤコブセンの実物を見たのは初めてであるから。中村氏は言った。

「私が，こんな椅子を手に入れたのは，そして，これを御堂筋の私の家においているのは，日本に美術品のある美術館がないからですよ。」

氏の話の中で，美術品のない美術館の話がしばしば出て来る。前に意匠学会例会での研究発表のときも，美術品のない美術館しか日本にはなくて，外国には美術品のある美術館がある，というような話をされたが，本当のデザイン感覚とか，造形感覚というものは，本当の美術品を「拝見スル」だけではなく，本当の美術品を「自分ヲ骨肉化シナケレバナラヌ」という氏の持論か，あるいは信念から，日本では美術館長が，美術品を買ってこれないから，中村真が買って来たのだ。」ということとなる。

× × × × × × × ×

さて，中村真造型科学研究室，及び中村真社長の営業種目を招介しよう。

1. 種々のアートディレクト。
2. 1から派生して，あらゆる造形のコンサルタント。

A）メーカーの場合……プロダクトデザイン

B）商店の場合……㈠店舗デザイン

㈡商品ディスプレイ

㈢グラフィックデザイン

㈣等々

3. 2 のサービスとして，経営の相談百般。
4. ほんまは，絵が一番描きたいんやけど，そうもいきませんので。（モダンアート協会，会員としての仕事）
5. それから，先生，教師としての仕事も仕事でしような。（浪速短期大学，大阪市立大学の仕事）
6. それに，町会長の仕事。（日赤奉仕団の副団長であるとか，そのため今年の夏は町内から出た明星高校の選手の応援に町内の人々を引率して甲子園に通われたとか……）

× × × × × × × × × ×

営業種目中の第一のアートディレクトの仕事について少々お話をうかがいました。

中西「アートディレクトといい，造形コンサルタントといい。新しい仕事の分野ですから，まだ，相談をする側が，充分，ディレクターや，コンサルタントの使い方を知らないのではないでしようか。」

中村氏「相談をしに来る人は，そんなむづかしい事は考えていませんよ。皆こうですよ。

『どうしまんねん。』

『どうしましょ』

これだけですわ。これだけでええのです。要は答える側のディレクターやコンサルタンの巾の広さ，狭さで決まるのですな。

だから，本当に巾広いディレクトの仕事となれば，どうしても商売に対するAdministration（管理，統制）というものを離れては考えられませんね。このコマーシャル—アドミニストレーションの上に立ったビジュアル・コオーディネーション（視覚的な調合）こそが，本当のディレクターとか，コンサルタントの仕事ですわ°」

北　根「ここでは，写真はやらないのですか。」

中村氏「やりたいのですがね，仲々大へんですわ。ミューラー・ブロックマンなど二人の専門家を置いてやっていますよ。僕もやりたいですね。しかし，カメラとモデルがあれば写真であるというような写真ならやりたくないですね。週刊誌の表紙の写真なんて，あれはポートレィトであって，カラー・フォトグラフィではないですね。

僕がやるなら，もっとユーモアーとか，ウイットとかをとり入れたポエティックなフォトグラフィーをやりたいのだが，現代日本の企業にはポエティックなんてものはありませんね。アスパラ，アスパラ，アスパラ，アスパラでやりぬこう。なんて調子ですから。それに近頃，梅田界隈の喫茶店でクロッキーブックを持った連中が議論しているのを聞くと，これからのデザインは，デザイナーか，フォトグラファーかというような議論ばかりで，何がデザインであり，何がフォトグラフであるかという本質なんてものでなく，どちらが今後，よく買われるだろうかということなんですね，これは芸術論争じゃありませんよ。

それというのも，写真はただカメラとモデルさえあれば出来ると思っているからですね。写真にコンポジションなんてものは要らぬと思っている輩ですよ。いや，案外コンポジションなんてものを知らないのと違いますか。そういうとコンポジションを教える所は余りにも少ないです

な。」

向　井「建築でもそうですよ。構造はあるが構成がない。」

中村氏「それは，美術館に美術がないからですよ。美術館に美術さえあれば，コンポジションは育つのですよ。」

こうなると，やや中村教の教祖的発言（？）であるが，真意は構成感覚というようなものは，知識として修得出来るものではなく，我々が実際に体験して修得するものであるから，よい伝統と，すぐれた環境で，洗練された体験を体験して，本当の構成感覚を養わねばならぬ。その一例として，美術館にもよい美術品を置かねばならぬ，という意味と受けとることにしよう。

更に教祖中村真の言葉がつづく。

中村氏「だから，美術館に美術さえあればデザイン教育なんて，特にとりたてていうこともなくなるのです。

デザインという言葉自身やめて了ってもよろしい。

グラフィック・テクニックとお札を読むこと（商売の意味と解釈いたしましよう）さえあればいいのじやないですか。グラフィック・テクニックとしては，空間管理の出来る幾何学を教えることですね。それにデッサンと図学。これさえあればグラフィック・テクニックとして充分です。

それよりも美術品のある美術館，これが無ければ，何もかもおしまいですがね。」

× × × × × × × × × ×

「美術品のある美術館教」の教祖から，いろいろと神器を拝見すをことにしました。

先づ，ヴェネチアの色ガラスの品々です。

1962年ヴェチア・ビエンナーレに出品されていたという。ヴェニーニ作の花器を初め，カットがほどこされている水差しや，つぼ，など数点。それに中村

氏の仕事机の上のランタンのシェードもヴェネチア・ガラスであり，玄関のランタンもそうでした。

中村氏「僕は，向うへ行ってから，本当にヴェネチアのとりこになりましてね。ヴェネチアは誰も彼も色に関心があるのですね。色がないとガラスではないと思っているのですよ。その点，同じガラスでもチェコ等は違いますね。やはり伝統ですよ。」

神器は，ヴェネチアのガラスだけではない。デンマークのスプーンやフォークも並べられる。オードーブルの皿は，中村真の陶画である。

次に，元井さんの所望によって靴のコレクションが披露される。みんなイタリヤ製の靴である。皮がワニだとか，トカゲであるとか，カンガルーであるというのではない。普通の牛皮である。しかし，その軽さと，やわらかさは独特のものである。

中村氏「何でもないデザインです。しかし，本当にはける様に作られているのですね。坊主が作るのですよ。一番すばらしい技術は修道院の修道僧の中に受けつがれて来た伝統によるのですね。」

× × × × × ×

神器は机の上にもころがっていた。美しい文字盤を持ったイタリヤの時計。

中村氏「ローマ字が本当に生きている国はイタリヤだけですね。」

文字盤は美しく，現代風にアレンジされたローマ字で描かれていた。

中村氏「僕の所には，こっとう品は二点しかないのですよ。」

見せていただいた，コットウ品は鉄斉の水墨掛幅とギリシヤの赤絵皿であった。

音楽について話が移ろうとしたが，音楽に弱い訪問者ばかりであったので，早々に辞を呈して美術のあるアトリエを去る事にしたのだが。

階下の仕事場は，二階のアトリエとはガラリと趣を変えて，非常にビジネスライクである。書架の書物の整理の見事さは全く敬服のほかはない。赤，黄，

緑，橙等の色紙を背表紙につけたケースに，一年分の雑誌を入れ，それに，Fとか，Gとか，Iとかいうイニシアルを附けて，夫々，フランス，ドイツ，イタリヤの各国別の雑誌を分類している。この分類の仕方が特にビジュアル・コオーディネートである。図書館でみるような，小さなラベルと数字による，無味な分類法とは異なる。

ともすると，「紺屋の白袴」となりがちな，デザイナーや画家自身のアトリエや仕事場にさえ，デザインの神経を行きとどかせているのは，大いに見習わねばならぬ事だと思う。

美しく，ひかえめ勝ちな奥様や，よくこえてボーリングが上手であるという息子氏の見送りを受けて，御堂筋に出た訪問者達は，夜風に当り乍らも，余りに一度にいいものを見た為，消化不良で，美術品のある美術館教に酔った如く，銀杏並木を歩いて行った。

× × × × × × × ×

英文学者である深瀬基寛が，曽てこんなことを何かの冊子で述べていた。

「教育の効用というものは，智慧を授け，芸を習得させ，ゴチソーを享受させることである。知識を教えることなどは，その本意ではない」という意味のことであった。ゴチソーを受けること。眼のゴチソー，耳のゴチソー，知識のゴチソー，味のゴチソー，すべて教育の効用の一つであろう。

我々は，中村アトリエをおとづれて真のゴチソーを受けた。

こんなゴチソーが，誰でも，何時でも，気軽に享受出来るようにありたいものだ。

そのためには，美術館には美術品がなくてはならぬのである。中村教祖の教えも少しは解って来たようである。このことがせめても，氏の多忙な時間をさいていただいたむくいともなれば幸甚である。（中西記）